



あけましておめでとうございます

ごあいさつ

九州国立博物館を愛する会 理事長 前田和美

昨年は会員皆様のご協力で、愛する会が大きく飛躍することが出来ました。

心より御礼申し上げます。九州国立博物館も大きく発展し、8月には来館者500万人突破し、12月には日中韓3国首脳会議が九博で開催され、アジアを代表する博物館へと目に見えた年でした。

そのような中、愛する会も様々な事業を行い、質・量とも大きく発展しました。

本年は子ども達が「気軽に親しめる博物館」運動を目指して事業を展開していきます。会員各位の更なるご協力をお願いしまして、新年の挨拶とします。

皆さま、良い年をお迎えのことと思いません。昨年はいろいろと暗いニュースも多く、今年に問題を持ち越しているようにも思いますが、本年はそれらを克服して明るい未来が感じられる年にしていきたいですね。

昨年末に、九州国立博物館を支援する会の会長であり、当会の最高顧問も勤めて頂いていた有吉林之助様がお亡くなりになりました。18年間の長きに亘り会を牽引され、国立博物館誘致・支援に多大のご尽力を注がれ、私たちにすばらしい財産を残していただきました。ここに謹んでご哀悼の意を表します。

そこで、今年の「第13回九博デー」は、有吉林之助様を偲び、誘致する会・支援する会・愛する会の20年を振り返り、またこれからの進む道を考える記念の会にしようと計画を進めています。皆様のご協力をどうかよろしくお願い申し上げます。

九州国立博物館を愛する会は、発足から1年半、皆様のご支持を得まして精力的に活動をしてきました。各方面から認めていただきよい評価を得ています。発足からわずかの年月でこれだけの活動ができたのは、支援する会での実績、ノウハウがあったればこそと思います。

本年度も、様々な企画を計画しておりますが、中でも「子どもと博物館」をテーマにしたイベントを行っていきたくと思っています。子どもにとって博物館の役割は？子どもたちが親しみをもち気軽に訪れる博物館とは？未来を担う子どもたちが博物館から様々なことを学んで欲しいものです。そのために愛する会は何ができるか考えながら活動を進めます。皆様のご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

T. S

おしら

九博子どもフェスタ

「博物館って意外とおもしろいね！」



日時 平成21年2月21日(土)～2月22日(日) 10:00～17:00

会場 九州国立博物館エントランスホール 21日～22日

ミュージアムホール 21日



みんな
来てね

昨年の「九博デー」でも皆様から出ましたご意見の一つが、「子どもたちが博物館に親しんで欲しい。」「楽しさ、おもしろさを感じて欲しい。」など、子どもにとっての博物館のありかたでした。当会がその一端でも担えればと計画を進めてまいりまして、上記のようなイベントをいたします。内容などの詳しいことはチラシ、または愛する会HPをご参照ください。多くの皆様のご来場を心からお願い申し上げます。

永井真佐美主任研究員に直撃インタビュー

—手に触れて遊び学ぶ『あじっば』—

Q:「あじっば」ってなあに?どんなところ?

A:「あじっば」は「アジアのはらっぱ」という意味の造語です。九州国立博物館の1階のエントランスホールにあり、こどもから大人まで楽しめる体験型展示室です。日本と交流のあったアジアの国々の文化を楽しみながら体験できます。資料に触れたり、音を聞いたり、匂いを嗅いだり、楽器を演奏したり、身体全体でアジアの文化を体験してください。勿論、入場無料です!靴を脱いで入室し、親子で心ゆくまで楽しみください。



Q:九博には、どうして「あじっば」があるの?

A:「あじっば」は、国立博物館では初めての常設の体験型展示室です。そして、こどもが博物館に親しむきっかけを作ってくれる場所です。九州国立博物館は、多くの市民の皆様方の協力があって作られた博物館です。ですから、「地域に開かれた博物館」を目指しています。自分の部屋のようにくつろげる場所、親子で安心して時間を共有できる場所、「あじっば」は九州国立博物館が目指す博物館の在り方を具体化した場所なのです。



Q:「あじっば」がこれから目指す方向は?新しい計画は?

A:「あじっば」の魅力は、ボランティアさんとの対話にあります。見たこともない不思議な玩具や資料などありますが、分からないことは何でもボランティアさんに尋ねてください。優しく教えてくれますし、一緒に遊んでくれます。「あじっば」は、これからもそういう場所でありたいと思っています。自分で作った作品を持ち帰ったり展示したりできるBOXキットや屋台の展示も、お客様に楽しんでもらえるような新しい企画を考えています。新しい「あじっば」に出会えますので、何度でも足をお運びください。





「あじっぱ」で、いつも子ども達と関わっておられる、ボランティアの

Q：日本の未来=子どもたちにとってあるいは博物館にとっての子どもたちとの関係を、地域の中でどのように考え活かしていけるか？

A：今の自分があるのは、やはり過去(昔)からの成り立ち(歴史)があつてのこと。子どもたちにそういうことの「気づきと関心」を持ってもらえるような手助けができればと思っている。その取っ掛かりとなるひとつが九州国立博物館では“あじっぱ”だと思う。

その“あじっぱ”で、実際に物に触れたり、作ったりと体験できることで子どもたちに博物館や歴史等に興味を持ってもらう。そのためには館長がいつも言われる「博物館は学校より面白く、教科書より分かりやすい」というところではないかと思う。

博物館と言うと硬いイメージがある。九州国立博物館では“あじっぱ”という体験型の展示室があることをたくさんの方に知ってもらい、博物館の硬いイメージを少しでもかえてもらいたい。その為には近隣からは来館し、体験してもらえよう、更なる広報活動も必要だと思っている。そして子どもたちの未来が平和で明るいものになることを願い、オーバーではあるが、博物館がその架け橋の一端を担うことが出来ればいいなと思う。

パパとして「九博」に望むこと



「愛する会」副理事長
青山 博秋

ただ今より受け売りパパの講釈を始めます。

1996年に文部省(現 文部科学省)が、“生きる力を育もう”とのスローガンを発表しました。それは、少年犯罪の低年齢化や精神的、肉体的にたくましい子供を育てる為に必要なものは何か?という問いに答えた、新しい「フレーズ」。以来、この“生きる力”が連呼されていますが、この生きる力の醸成には実体験や体験学習が効果的だと、セミナー等で随分聞かされたものです。現在でも、情緒・感情・直感・イメージを司る、右脳の発達が不十分だと、不安や恐怖・うつ等を引き起こす可能性もあり、しかも体験重視の右脳教育は理解力が進むので、幼いうちからこの右脳を鍛える体験学習が良い、云々カンヌンとあちこちで言われた気がします。

この「体験学習」と聞くと何やら難しそうですが、実際には、部屋でテレビやゲームばかりに熱中せず、アジっぱで友達と一緒に遊具で存分に遊ぶ、休日に博物館に出かけベンチでどこかの誰かと話ながら弁当を食べる、ジオラマ展示や映像を五感で感じて楽しむ、触れて良い展示物にベタベタと触ってみる、あるいはボランティアの知らないおじさんに怒られる等、こういう実体験こそが欠かせないと思うのです。

こういった実体験をたっぷり出来る場所やスペース、しかも子どもを対象とした機会をまだまだ欲しい!まさに体験学習ザンマイの場所として!

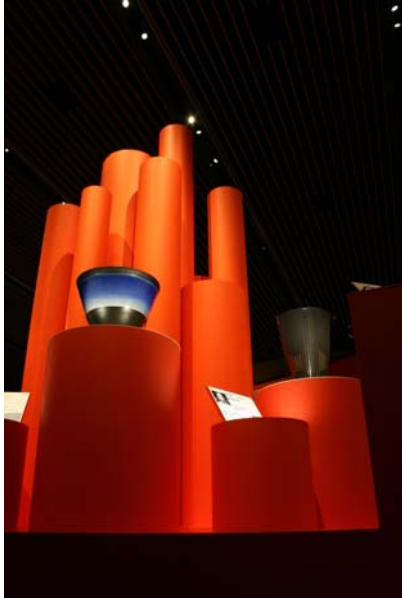
生きる力を持った子供が育つ為の最適な環境!これこそ、子どもも主役の博物館だと思うこの頃です。

《 九博 特別展の見どころ 》

《特別展紹介》九州国立博物館開館三周年記念・西日本鉄道創立 100 周年記念

特別展「工芸のいま 伝統と創造 —九州・沖縄の作家たち」

伊藤嘉章(九州国立博物館)



文化財には有形と無形とがあります。普段、皆様が博物館でご覧になっている文化財が有形文化財です。これに対して、無形文化財は、能や歌舞伎のような芸能や、工芸を作る技術で、それ自体には形が無い文化財です。今回の展覧会は、九州国立博物館が初めて無形文化財を正面から扱い、伝統の工芸技術の中から新たな創造を行なっている伝統工芸をテーマとしています。

九博は九州・沖縄という地にある国立博物館として、地域に対する貢献を考えていかなければなりません。今回の展覧会は、第一部として、日本工芸会に所属し、九州・沖縄で活躍する 137 人（内、人間国宝 7 人）の方から作品を出品していただくことになりました。2000 年以降の代表作をご出品いただき、九州・沖縄の現在における到達点をご覧いただきます。それは同時に、それぞれの作家の方の今後の発展の出発点となるものです。

第二部は九州・沖縄の工芸を育て、支えてきた人々というテーマを設けました。九州・沖縄の先輩たち、さらにさまざまな交流によって、九州・沖縄の作家たちに大きな影響を与えてきた日本を代表する作家たち、24 人（内、人間国宝 20 人）の名品が並びます。その作品はまさに現代工芸の歴史を示すものと言えます。

今回の展覧会では、図録と展示が連動しています。そのコンセプトは「工芸を楽しむ」。九博のスタッフが取材を通して、体感していった工芸の凄み、楽しさ。これらを観客の方々に伝えることを大事にして、図録を作り、展示を考えました。ここを見たら、作家の苦心が分かります。あるいは、この技の凄みはこういう所ですということを、展示室でご覧いただけるようにしています。この作家はどのような道をたどって今に至り、何を作ってきたのかは図録でご覧いただけます。それらによって、初めて伝統工芸をご覧になる方にも、その楽しさを感じていただけることと思います。

日本の伝統の中で生まれ、現代も新たな創造を続ける九州・沖縄の工芸、その素晴らしさをこの機会に多くの方にご鑑賞いただけたらと思います。そしてより多くの方々がご覧になることで、今後の九州・沖縄の工芸がさらに大きな発展をしていくことを、願っています。

会 期 平成 21 年 1 月 1 日（木・祝）～ 3 月 15 日（日）
休 館 日 月曜日（月曜日が祝日・振替休日の場合は開館、翌日休館）

ひなの国九州フェスタ2009

1月25日(日)9:30~17:00
エントランスホール D 申込なし

佐賀ものづくりミュージアム

1月30日(金)~2月1日(日)
9:30~17:00
エントランスホール・ミュージアムホール

**「工芸のいま 伝統と創造」展関連座談会
祭りや伝統工芸—山笠のハッピーは久留米餅!?**

2月7日(土) 13:30~15:00
ミュージアムホール B

要申込・受付先着順 (特別展入場券か半券要提示)

**「工芸のいま 伝統と創造」展記念
朝日寄席~落語と寄席文字~**

2月8日(日)
13:00会場13:30開演
前売2,000円 当日2,500円

**「工芸のいま 伝統と創造」展関連イベント
作家がお茶のおもてなし**

2月7日(土)・8日(日) ①11:00~
②13:00~③15:00~
エントランスホール B 申込なし・

**「工芸のいま 伝統と創造」展関連講演会ト
金子賢治が語る 工芸のいま 伝統と創造**

2月22日(日) 13:30~15:00
ミュージアムホール B

要申込・受付先着順 (特別展入場券か半券要提示)

**「工芸のいま 伝統と創造」展関連イベント
有田磁器の音コンサート**

2月28日(土) ①11:00~
②13:00~ ③15:00~

楽しい美味しいお茶の入れ方セミナー

3月1日(日) ①11:00~ ②13:00~
③15:00~

エントランスホール B

要申込・受付先着順 (特別展入場券か半券要提示)

(※時間、場所、内容等が予告なく変更になる場合がありますので、ご了承ください。)

- ※注1 B・「工芸のいま 伝統と創造」イベント事務局 ☎092-715-1170 (平日10:00~17:00)
C・朝日新聞社事業本部西部企画事業チーム ☎092-411-1137 (平日10:00~18:00)
D・九州のひなまつり広域振興協議会(八女市商工観光課) ☎0943-23-1596
E・佐賀市(佐賀ものづくりミュージアム実行委員会事務局) ☎0952-40-7106



九博豆知識

九博の秘密

九博には最新の精密機器がいっぱい!

でも、最新の精密機器が展示されている訳ではありません。貴重な文化財を次の世代に伝えるために、保存状態を調べると共に、その材質や技術・技法も調査し、さらに、最新のデジタル技術で記録しています。その情報は、文化財の修復や保存に、その他に活用されています。たとえば、X線CTスキャナは、大きな仏像もそのまま全身をスキャン出来ます。これは病院のCTより精密度は、5倍で人には使えません。フリーアームスタンド付実体顕微鏡、X線透過撮影装置、分析走査電子顕微鏡、非接触光学式三次元デジタイザなどなど多数です。日曜日のバックヤードツアーで、もしかしたら窓越しに見ることが出来るかもしれませんよ。

(大坪)

平成 20 年度 寒糊炊き

1月20日、九博では今年も「寒糊炊き」が行なわれました。愛する会と九博ボランティアの希望者でお手伝い兼見学会があり、それに参加。焦げないように攪拌するのはきつい作業でした。



「寒糊炊き」。読んで字の如し、寒い時期に糊を炊く（作る）こと。この糊は、文化財の修復に使います。糊の材料は生沈（なまじん）とよばれる小麦デンプン。これを水に溶かし加熱しながら、こげない様に気をつけて、鍋底からよく攪拌します。この作業が一番大変・・・。

数時間かけてできた糊は、甕かめにいれ、数年から10年くらい保存します。保存中にまったく開封しなかった糊は、嵩かさが減り表面にカビなどによって作られた膜ができています。

保存中に水替えをする時は、毎年寒糊を作る時期に合わせて開封し、中の水を入れ替えます。

この古糊の使い方は、先ず、甕かめから出し、水切りをした古糊をこします。こした古糊を水で薄めて水糊にして使います。

修復する文化財によって、水の量を微妙に加減しているとのこと。

また、接着力の弱い古糊を使用することで、柔軟に仕上げることができるそうです。

修復作業は勿論のこと、寒糊炊きも大変なお仕事だということがよく解り、これからは文化財を観る目が少し変わるかも知れませんね。

「文化財とびうめファンド」誕生！

このたび、文化財保護のために国内外の情報や人材の交流を行い、また保存技術の継承と人材の育成、さらに文化財に関する市民向けの講演会や保存専門家との交流を実施し、文化財と博物館、そして市民の皆様を結ぶ新しい輪として、「九州文化財国際交流基金」（通称・とびうめファンド、味酒安則理事長）を設立いたしました。

まずは、九州国立博物館の文化財保存修復施設へ、国内のみならず海外から文化財修理や保護の研修や見学を希望される、たくさんの方々への助成を計画しています。

愛する会の皆様には、九州の「あしながおじさん・おばさん」として、物心両面からのあたたかいご支援とご協力をお願い申し上げます。（事務局 国宝修理装演師連盟九州支部内）

私たちの宝を

私たちの力で

私たちの明日へ伝えよう

可憐に咲くビオラたち～ピッカ美化隊～

昨年11月21日、ピッカ美化隊はビオラ400本を博物館の花壇とプランターに植えました。今年のビオラは小さな苗ですがしっかりした良い苗でした。1月に入り寒さにも負けず、各株とも3～5本の花を咲かせています。



今年の元日は雪でした。花壇には白く雪が積もりその上から花だけが顔を出し、たくましく咲いているビオラたちに感動しました。

元日の雪の降りたる花壇には植ゑしビオラが可憐に咲けり (井手)

第4回文化ボランティア全国フォーラム in 東京(文化庁委嘱)に参加して

佐藤 敏子

第4回目のフォーラムは、昨年10月30日より3日間の日程で、東京で開催されました。同実行委員会より九博の誘致・支援活動から現在の愛する会の「かけはし」活動まで、20年間の長い継続のあゆみを事例報告しませんか、という話がありました。私たち市民が願うことを形にしていった過程は、全国でもおそらく例がない先進的な市民活動であり、全国の皆さんにぜひ知っていただきたいと思い、思い切って、深田重實副理事長と佐藤の2名で初めて参加しました。

日程は、第1日の全体会は日本橋劇場で開会行事が行なわれ、第3日は江戸東京博物館で全体のまとめが行なわれました。第2日に10の会場で分科会がありました。愛する会の発表は、第5分科会、テーマは「ボランティア無しにはなにも始まらない！—ボランティア大自慢大会」、会場は東京都立世田谷美術館でした。独自の活動を展開している以下の4団体が発表を行ないました。以下は発表順です。

1. 美術館を丸ごと支えるボランティア

～原爆の図・丸木美術館ボランティア

館が存続するために、学芸員もボランティアも各人の能力を生かし、そのときできることを精一杯こなし、しかも楽しんで皆なで支え合って館を運営しておられ、まさに家庭的・温かい大家族の姿を感じさせる美術館とそれに係わる人々でした。

2. 自主的に企画・運営を行なうみんなの市民のパートナー

～国立民俗学博物館みんなくミュージアムパートナーズ

ここは、博物館と研究所の2つの機能を有しており、ボランティアはNPO化もして公的機関としてのサービス面を担う役割を受け持っておられ、職員とボランティアはパートナーとして捉えられています。

3. 国博誘致活動から20年のあゆみ—九博と市民の“かけはし”となって

～九州国立博物館を愛する会

私たち愛する会は、誘致・支援する会の18年、愛する会の2年余、内容がも多くて予定の時間を大きくはみ出してしまいました。分科会の担当の方々からの講評として「子を見守る母」の言葉をいただきました。私たちの会は博物館を生み出し、りっぱに育てよ！と活動をしてきたとも言えます。言い得て妙だなあ！と感心し納得しました。

4. 美術館でしかできないこと、ボランティアにしかできないこと

～世田谷美術館 鑑賞リーダー

この館ではボランティアを利用者の代表と位置づけ、本音で館を考えてくれる意見を「館を導く道しるべ」と捉えて、運営の参考に生かそうという館の姿勢があり、ボランティアは楽しんでのびのび絵画の鑑賞リーダーとして活動される姿が印象的でした。

以上が4館の発表のあらましですが、他の分科会でも大変ユニークな取り組みが発表されたようでした。全体の印象として感じたことは、博物館・美術館だけではなく市民の様々な文化活動から発展したボランティア活動が、公民館などを拠点に展開されており、まさに団塊の世代の出番という感じを受けました。また、企業にもボランティアの芽吹きがあり、今回の発見でした。



鉄道模型の世界にはまって、早20年になる。きっかけは子どものおもちゃを買ってやりにデパートに行った時だ。Nゲージの電気機関車車両セットが目にとまった。値段も手頃なので子どものおもちゃはそっちのけで促購入した。

子どもの頃から鉄道模型は好きだったが、当時、まだ外国製しかなく、高価で子どもが買えるような代物ではなかった。買いたくて長時間ショーウィンドウを眺めていた記憶がある。

最初は単に動かす。そのうち車両がだんだん増えてくる。今度は情景の中を走らせてみたくなる。レイアウト(情景を載せたパネル)を作る。

このころ東京勤務になった。東京は電車の宝庫、まだこのころまでは魅力的な旧型車両があった。特に私鉄にはまった。東急、江ノ電等々写真を撮りまくった。気に入った写真の風景をレイアウトで再現。だんだんレイアウトが増えた。

2年後に福岡に戻る。とうとう我が家の6畳間をレイアウトが占領する事態に。このころから家族の目が厳しくなった。妻からは部屋の掃除が出来ない等々の苦情。息子たちはとうとう模型の世界を卒業。厳しい視線に晒され孤軍奮闘。

そのうち、6畳間を息子に明け渡す事態に。泣く泣く走行を断念。その後はジオラマとして鑑賞のみ。ここで私の鉄道模型の世界も終了したかにみえた。

ところが、4~5年前好きな私鉄車両の模型を製品化しているメーカーを発見。また車両が増えてしまった。当然、走行させたくなる。しかし、昔みたいにレイアウトを作る根気なし。どうしよう。とうとう完成品レイアウトを買ってしまった。現在、時々走行中。

自虐的に言うと社会に全く役立たない、家族のためにも役立たない、妻の理解があつてこそ続けられたこの趣味。オタク、暗いとか言われ続けてきた、人前でもあまり話せなかったマイナーな趣味。

ところが最近、鉄道ブーム再来。いよいよこの世界もメジャーになる気配。特にテレビドラマで鉄ちゃんを取り上げられて、女性ファン(鉄子)も急増中。私の近くにも鉄子が存在。楽しくなってきた。

さあ、この趣味どうしよう。このまま進むとちょっと怖い。いや楽しい…

…何処まで行くのかこの世界。



編集後記

今年は、日本の未来を荷う子どもたちが主役です。美しいもの心豊かなものに子どもの頃から接する機会をたくさん持っていただきたい。そのためにも博物館を大いに利用しましょう。

